

第5回 『源氏物語』

次の文章は光源氏が末摘花の邸を訪れる場面である。これを読んで後の問に答えなさい。

卯月ばかりに、花散里を思ひ出で聞こえたまひて、忍びて、対の上に御暇聞こえて出でたまふ。日ごろ降りつるなごりの雨少しそそきて、をかしきほどに月さし出でたり。昔の御歩き思し出でられて、艶なるほどの夕月夜に、道のほどよろづのことと思し出でておはするに、形もなく荒れたる家の、木立しげく森のやうなるを過ぎたまふ。

大きな松に藤の咲きかかりて月影になよびたる、風につきてさと匂ふがなつかしく、そこはかとなきかをりなり。橘にはかはりてをかしければさし出でたまへるに、柳もいたうしだりて、築地もさはらねば乱れ伏したり。見し心地する木立かなと思すは、はやうこの宮なりけり。いとあはれにておしとどめさせたまふ。例の、惟光はかかる御忍び歩きに後れねばさぶらひけり。召し寄せて、「ここは常陸の宮ぞかしな、」しかはべる」と聞こゆ。「ここにありし人はまだやながむらむ。とぶらふべきを、わぎどものせむもところせし。かかるついでに入りて消息せよ。よくたづね寄りてをうち出でよ。人違へしてはをこならむ」とのたまふ。

ここには、いとどながめまさるころにて、つくづくとおはしけるに、昼寝の夢に故宮の見たまひければ、覚えていとなごり悲しく思ひて、漏り濡れたる廂の端の方おし拭はせて、ここかしこの御座ひきつくるはせなどしつ、例ならず世づきたまひて、

亡き人を恋ふる袂のひまなきに荒れたる軒のしづくさへ添ふも心苦しきほどになむありける。

惟光入りて、めぐるめぐる人の音する方やと見るに、いささか人げもせず。さればこそ、往き來の道に見入るれど、人住みげもなきものと思ひて、帰り参るほどに、月明くさし出でたるに見れば、格子二間ばかりあげて、

簾動くけしきなり。

語句

。そそく「注く」へ近せ以降は「そそく」自動

①水が流れこむ ②雨・雪などが降る

③涙がしきりに落ちる

なつかし「懐かし」形 ①心がひかれる、慕わしい、

②親しみやすい、

ういち「築地」名 土塀

。さほろ「障る」動 妨げられる、さしつかえる、

。はやく「早く」副 ①すぐに。とくに。②昔。以前。③元来、

④(双)助動詞「けり」を文末に伴って「驚いたことには、

なんと実は、

。おし「押し」接頭 (動詞に付いて力をこめてする、

しいてする、の意を添える。また、単に動詞の意を

強める、

。ながむ「眺む」動 ①物思いにふける ②じっと遠くを見る

。ながむ「詠む」動 朗詠する

。ものす「物す」動 ①ある。いる ②する

。ところせし「所狭し」形 ①窮屈だ ②大げさだ。仰々しい

③威厳がある

。せうそこ「消息」名 ①手紙。伝言。②訪ねること。

案内を請うこと、

。を「接助」(文中では「単純接続」へ軽く前後をつなぐ、

いづ「出づ」自動 出る。現れる

他動 ①外に出す。表す ②「うち出づ」「言に出づ」

などの形で「口」に出して「言う、うち明ける、

補動 (動詞の連用形に付いて) ①くしはじめ、

②く「外に」出る

。つくづく「と」「孰く」と「副」 ①しみじみ物思いにふける、

②ぼんやり入することなくもの寂しい、③よくよく念を入れ、

。よづく「世付く」動 ①世慣れる ②世間なみになる、

③男女の情を解する、人情を知る ④俗化する

。ひとげ「人氣」名 人の気配。人のいるようす、